

## 総称的判断について

山下智弘(慶應義塾大学)

本発表の目的は、真理および知識の最も抽象的な概念から出発して、原則の論理形式を導出し、それによって総称的判断の概念を解明することである。

大まかに言えば、総称的判断とは、実例と例外とを非対称的に説明することによって特徴づけられる一般的命題である。たとえば、「山茶花は冬に花をつける」という総称的判断は、「この山茶花は去年の冬に花をつけた」という個別的な事実(実例)を単独で説明するが、「あの山茶花は去年の冬に花をつけなかった」という事実(例外)を単独では説明せず、別の要因と一緒に説明する。

原則の論理形式についての注目すべき研究は、Sebastian Rödl の *Kategorien des Zeitlichen* (Frankfurt: Suhrkamp, 2005)である。彼は、時制を持つ命題の分析から出発して、時制が命題の内容ではなく形式であること、時制命題の可能性は時相命題のそれに依存していること、そして時相命題の可能性は総称的命題の可能性に依存していることを示している。

Rödl の議論は、総称的判断にくらべて常識にとって受け入れやすい個別的な経験判断、すなわち時制命題から出発する点で、一定の利点を持っている。また、総称的判断の必然性を時制命題の可能性に基づいて説明する点で、しかし同時に、出発点となる時間の概念については、それが出発点であるがゆえに、十分には解明できないという、方法論的に必然的な制約がある。もちろん、論理学の議論が我々の知識に暗黙的にすでに含まれているものを明示する作業である以上、すべてのことを単一の議論で明確にすることはできない。しかし、総称的判断と経験的な個別判断の関係を複数の仕方でも議論することによって、互いの死角を補うことは可能だろう。

直観に依存した時間的命題の論理形式から出発する Rödl の方法に対して本発表では、命題の一般的形式としての最も抽象的な真理概念、およびその概念から直接的に導出される最も抽象的な知識概念から出発する。この方法では、個別的な時間的命題は総称的判断の論理的形式を導出するための基礎になるのではなく、判断一般が総称的判断とそれによって説明される個別的判断へと分割されることによって登場することになる。

本発表の議論は、真理・知識の最も抽象的な概念から出発する。一方で、真理は事実一般ないし判断一般の形式を表す。あらゆる判断は同時にその判断の真理についての主張である。そこから、判断は非偶然的に真であり、判断が真であることは判断が判断であることに含まれる契機であるということが帰結する。すなわち、知識とは判断の単なる一種ではなく、模範的な種であり、判断に含まれる妥当性の主張は、その判断が知識であるという主張である。

しかし他方で、真理と知識の最も抽象的な概念に含まれる限りでの知識主張の概念は、単なる信念と知識の区別を理解できるようにはしない。それゆえ、真理・知識の最も抽象的な概念はより具体的な概念へと展開される必要がある。

そうして現れる真理・知識の第2段階目の概念は、真理と知識にはその十分な根拠が必要であるという論理的事実、すなわち充足根拠律として表現される。つまり、知識主張は自分の判断の根拠を提示するという姿をとる。ところでAがBの十分な根拠であると考えることによってBを判断することは、推論と呼ばれる。それゆえ、知識主張は自分の判断を推論の結論として提示することになる。まず我々は、命題の一般形式としての真理の概念に含まれる第1の推論形式、すなわちその論理的複

雑性が真理操作によってのみ構成されるような推論の概念によって、充足根拠律を理解しようとする。しかし、そのような推論は知識主張としては無効であることが明らかになる。なぜなら、そうした推論においては前提が結論を含意するため、前提を知るために厳密には結論を知る必要があるからである。そして、否定的には、図式的な演繹的推論とは異なる推論形式が必要であることになる。すなわち、前提が結論を含意しないが、結論の充足根拠となるような推論である。こうした推論の形式として、総称的判断から個別的な経験的判断への推論を説明する。

本発表のもう1つの目的は、Rödl が同書で言及しているが詳論されていない、〈個別的な経験的判断の主体は個別的であり、総称的判断の主体は一般的である〉という考えを発展させることである。Rödl は同書の最後にこれに言及するだけで、その意味を詳しく説明してはいない。本発表では、総称的判断の持つ知識主張の論理的性格として、総称的判断の主体の総称的性格を説明することを目指す。

抽象的に捉えられた判断一般・真理一般の主体は、主体一般であり、それ自体としては個別的主体としても、総称的主体としても理解されない。判断が経験的な個別判断と総称的判断へと区別されるならば、経験的な個別判断の主体は、時間的に存在するものから直観への触発を受けうる存在、すなわち個別的な主体であるが、総称的判断はそれ自体としては時間的な判断ではない(あるいは、Rödl の言葉を借りれば、遍時間的(zeitallgemein)な判断である)ため、その主体は個別的ではなく総称的、つまり分配不可能な「我々」であるとされる。しかし、一見すると、我々は一人でも「山茶花は冬に花をつける」ということを判断することができるように見えるし、また知ることでもできるように見える。

本発表では、実際にはそうではないということ、総称的判断における知識主張の性格を検討することで説明する。おおまかに述べれば、次のようになるだろう。個別的判断についても総称的判断についても、その知識主張を検討する仕方は一般的な慣習を形成しはする。たとえば、「あのビルは4mの高さだ」「どうしてそう思うんだ?」「そう感じたんだ」というやりとりがあったとすれば、個別的判断の正当化を巡るこのやりとりの、最後の一手は適切ではない。しかし、個別的判断の能力はひとによって異なることがあり、とても耳のよい人は、他の人には聞こえなくてもある出来事を経験して知ることができる。「この部屋に羽虫がいるな」「どうしてそう思うんだ?」「羽音が聞こえるじゃないか」「全然聞こえないぞ」というやりとりに対して、「私は耳がいいんだ」と述べることは、上の例とは異なり、ある程度の適切さを持つ。言い換えれば、知覚能力を参照することは経験的な知識主張を検査ないし制御するための一般的な慣習だが、その能力のには個人差があることが受け入れられる。だが、総称判断ではそうはいかない。たとえば、特定の手続きによって総称的判断に説得力を与えるためにはデータの数が少ない場合に、別の統計処理の方法を考案することによって対処するという事例はあるが、その場合に参照される知識主張の根拠は、誰にでも(適切な訓練と能力があれば)再生産可能な、あるいは少なくとも理解可能な一般的形式であって、視力や聴力とは異なり、個人に帰属する能力ではない。逆に言えば、特定の手続きによって総称的判断を根拠づけることに異論が持ち出されたとき、「私はこの手続きをとるのがうまいんだ」と応答することは、「私は耳がいいんだ」という応答とは異なり、適切ではない。

このような知識主張の性格から、総称的判断の主体は総称的であるという Rödl の主張の意味が理解される。これはまた、真理・知識・根拠といった概念のより具体的な意味を明らかにするためにも役立つだろう。